

# ふるさと見て歩き

## 第38回

### 産婆いよと 子安地藏

「お産は棺桶に片足を突っ込んでするもの」といわれた時代がありました。今から五十年ほど前に自宅出産と病院出産の割合が逆転するまで、そんなお産を支えてきたのは地域に密着したお産婆さんたちでした。



▲いよの建立した石造子安地藏

### ◇産婆いよの半生

高度経済成長期以前の自宅出産の時代を支えたお産婆さんたちは、八十代を超えて今なお元気に活躍しています。しかし時代がさかのぼるほど、彼女等の活躍は分からなくなっています。医者と違い家業として継承されることのない女の仕事であり、記録を残す事もほとんどなかったからです。

そんな中で、その足取りの分かる江戸時代生まれの産婆が上小瀬村（緒川地域）の「小林いよ」です。いよは江戸後期の弘化三年（一八四六）頃、赤土村（常陸太田市）に生まれ、幕末から明治に変わる頃、上小瀬村

の小林彦衛門に嫁ぎました。その数年後、明治九年（一八七六）十二月に、地租改正後の租税の減租延納願いに端を発した小瀬一揆と呼ばれる騒動が起こります。首謀者のひとり大町甚左衛門の実弟だった彦衛門もこの一揆で中心的な役割を担いいます。そして捕縛、処刑されてしまうのです。

夫亡き後、いよは処刑者の家族という偏見に耐えながら小林家に残る決心をしました。子どもがなかったいよは赤土の生家から実弟を呼び寄せ、小林家の跡継ぎとしました。そして家業の農業を弟夫婦に任せる傍ら、いよはお産の介助をする「トリアゲババ」を生業として働き始めました。なぜそこまでして婚家に残ったのでしょうか。そこには、一揆の中心人物のひとりだった夫の償いとして、上小瀬に残り人々の役に立ちたいという

気持ちがあったのでは、と子孫の方は語ります。

### ◇産婆としての活躍

明治初期、上小瀬村近在には産婆、トリアゲババがおらず、離れた村から呼んで来ていたようです。そこでいよは経験を重ねながら出産の介助を身に付けていきました。いよは取り上げ方がうまいと評判で、遠方からもお産の依頼が絶えませんでした。大正期には取り上げた児の数が千人を超えました。いよはこれを記念して、大正三年（一九一四）三月、自宅近くに子安地藏の石仏を建立しました。そして地元の本郷組の人々がいよを記念する木造の地藏尊を地藏堂に安置しました。この地藏尊の背面には「小林いよ婦紀（記）念尊」と刻まれています。

いよは昭和十一年に亡くなる直前まで産婆渡世を続けていました。彼女の次の世代からは産婆規則や保健婦助産婦看護婦法などの法整備が進



▶本郷組内の人々が寄進した木造地藏尊

み、日本産婆会、日本看護協会などの職業組織や組合ができ、就業環境も整備されていきます。いよは江戸期以前から脈々と続く、專業化する以前の「産婆」「トリアゲババ」の最後の世代として細々と語り継がれてきました。今と違ってお産が死と隣り合わせだった時代、しかし一方で、お産は病気ではないと言われ出産直前まで農作業などをしなければならなかった時代、彼女が存在は医療と距離を置く庶民になくてはならないものだったにちがいありません。現在でも毎年八月二十日に「御神酒あげ」と呼ばれるお祭りが地区の方によって行われています。子安地藏にいよを重ね合わせて組内の人々が御神酒を受けて子の成長や無病息災を祈るのです。

※小林茂さんに聞き取り調査に御協力いただきました。



▲いよの墓（地藏の後ろの石塔）

歴史民俗資料館

☎ 52-1450